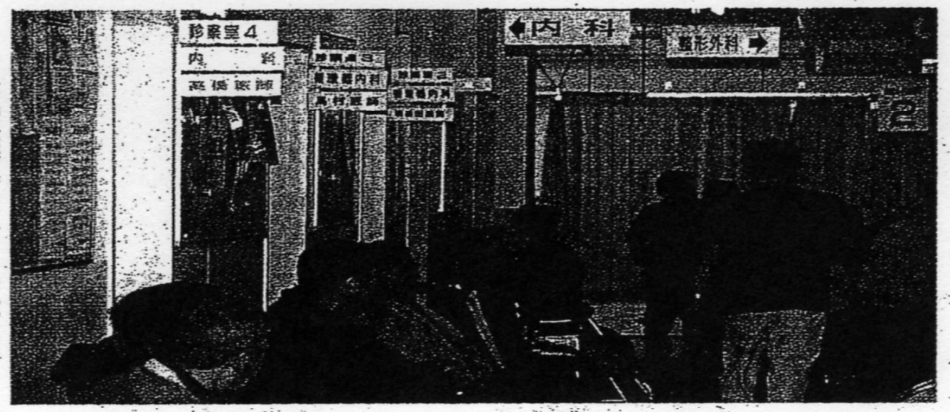
医師消える恐怖

引き揚げ拡大

地域住民の通い慣れた病院から次々と消えていく医師たち。道内三つの大学医学部が各地の病院で進める医師の引き揚げは、地域医療の現場に深刻な影を落としている。医師の異動時期となる春に向け、医師引き揚げはさらに増える恐れもある。われわれの健康を守る医療体制が、危機にひんしている。

（医療問題取材班）



4人の内科医師すべてが3月いっぱいで離れる見通しとなった市立根室病院の待合室＝1日

通院に片道2時間

根室市民

内科の常勤医四人すべてが三月末にいなくなる見通しとなった市立根室病院。

「これから、どの病院に通えばいいのか」。根室市の無職横沢シゲさん（八〇）は一日、病院入り口でそう声を振り絞った。百二十キロ離れた釧路市の病院に通うと、往復バス賃は四千百八十円。家族の車で送ってもらっても、片道二時間以上かかり、体に大きな負担となる。

北大と旭医大が小児科と産婦人科の医師を三月末で引き揚げる釧路労災病院でも一日、患者から「どうなるのか」と、電話が相次いだ。

釧路市内では、年間約二百五十件のお産を担ってきた産婦人科開業医が四月末で分娩（ぶんべん）の取り扱いを中止することも明らかになっている。

五月からは釧路、根室の両管内でお産を行えるのは、四カ所の病院しかなくなり、地域住民の不安は増しそうだ。

集まらぬ新人医

道内3大学

「今までも綱渡り状態でやりくりしてきましたが、その綱も完全に切れそうなんです」

釧路労災病院から小児科医を引き揚げる北大小児科の有賀正教授は、そう釈明する。

二〇〇四年に導入された臨床研修制度の影響によって進んだ大学病院の人手不足。北大小児科でも今春、研修を終えて大学に所属することを決めた医師は五人で、前年の十人から半減。新人医師の大学離れの傾向はさらに強まっている。北大病院関係者は「入ってくる医師が減った分は、地方病院からの引き揚げで補わざるを得ない」と打ち

医療が危ない

北海道新聞　2007. 02. 02